

(3) 果 樹

リンゴ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分	その他	備 考
					kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a		
地帯区分1	ふじ	わい化栽培 4.5~5 ×2.5 ~3m	わい化栽培 4,000	秋肥:9月下旬~10月上旬 冬肥:12月	5 3	8	12	(*牛ふん堆肥1,000) 基準:1 上限		・他の地帯区分は以下のとおりとする。 地帯 品種 窒素(kg/10a) 区分 秋肥 春肥 追肥 (2-3月) (6月) 2 ふじ 7 - - つがる 8 - - 3 ふじ 2 2 2 つがる 3 2 2 4 ふじ 3 3 - つがる 4 3 - 5 ふじ 4 3 - つがる 6 3 - 6 ふじ 7 - - つがる 8 - - ・樹齢別の施肥量は、10aあたり窒素成分で1~2年生2kg、3~4年生5kg/10a前後を標準とし、リン酸とカリはそれぞれ窒素の半量、等量を施用する。施肥は樹冠の拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、6年生前後から成木の施肥量を全面に散布する。
		普通栽培 8×8m	普通栽培 4,000	合計	8	8	12			
	つがる	わい化栽培 4~4.5 ×2~2.5m	わい化栽培 3,800	秋肥:9月上旬~中旬 冬肥:12月	6 4	8	12	(*牛ふん堆肥1,000) 基準:1 上限		
		普通栽培 8×8m	普通栽培 3,800	合計	10	8	12			
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。地帯区分2、6では肥沃度が高いので、施用は樹勢安定後に開始する。					
イ 幼木~若木にかけて施肥しない樹間部分は草生とし、地力の低い土壌では窒素、カリを施肥部分で5kg/10a前後となるよう施用するとよい。					イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するの、その分減肥する。					
ウ 秋肥は速効性と緩効性の肥料を組み合わせる。					ウ 山間部の耕土の浅い園では、堆肥の投入を積極的に行う。					
エ 秋肥の施用時期は、樹勢が強い場合は10日ほど遅くする。土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。また、樹勢の低下が認められる場合は春肥の比率を増やし、かん水等により土壌の乾燥を防ぐ。さらに秋肥で樹勢の低下が認められる場合は、その一部を春肥にまわす。					エ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。					
オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。					オ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。					
カ カリ過剰園ではカリの投入を一時中止する。また、必要に応じて苦土の投入を行う。										

モモ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分	その他	備 考
					kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a		
地帯区分1	日川白鳳、暁星	7×7m (20本/10a)	2,400	秋肥:9月 冬肥:11~12月 春肥:2~3月	5 5 2	10	12	(*牛ふん堆肥1,000) 基準:1 上限:2		・他の地帯区分は以下のとおりとする。 地帯 品種 窒素(kg/10a) 区分 秋肥 冬肥 春肥 追肥 (6月) 2 日川白鳳等 5 5 - - あかつき 7 5 - - 川中島白桃等 8 6 - - 3 日川白鳳等 5 - 4 2 あかつき 7 - 4 2 川中島白桃等 8 - 4 2 4 日川白鳳等 7 5 - - あかつき 7 5 - - 川中島白桃等 8 6 - - ・リン酸施用量は土壌条件により8~10kgの範囲とする。 ・樹齢別の施肥量は、1樹当たり窒素成分で苗木60g、2~3年生100g、5年生300g前後を標準とし、リン酸とカリはそれぞれ窒素の50%、80%程度を施用する。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、7~8年生から成木の施肥量を全面に散布する。
		あかつき	7×7m (20本/10a)	2,600	秋肥:9月 冬肥:11~12月 春肥:2~3月	7 5~7 2	10	12		
	川中島白桃、ゆうぞら	7×7m (20本/10a)	3,000	秋肥:9月 冬肥:11~12月 春肥:2~3月	8 6~8 2	10	12	(*牛ふん堆肥1,000) 基準:1 上限:2		
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。					
イ 幼木~若木にかけて施肥しない樹間部分は草生とし、地力の低い土壌では窒素、カリを施肥部分で5kg/10a前後となるよう施用するとよい。					イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するの、その分減肥する。					
ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。また、樹勢の低下が認められる場合は春肥の比率を増やし、かん水等により土壌の乾燥を防ぐ。					ウ 山間部の耕土の浅い園では、堆肥の投入を積極的に行う。					
エ 秋肥は速効性の肥料を用いる。					エ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。					
オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。					オ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。					

ナシ（日本ナシ）

＜棚栽培＞

対象地域 (土壌)	品種名	栽植 密度	目標 収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥 (種類) N成分 kg/10a	その他 kg/10a	備 考	
					kg/10a	kg/10a	kg/10a				
地帯区 分1	幸水	7×7m (20本/ 10a)	3,500	秋肥：9月	5~10			(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：1		・他の地帯区分は以下のとおりとする。 地帯 品種 窒素(kg/10a) 区分 秋肥 冬肥 春肥 追肥 (2-3月) (6月)	
				冬肥：11~12月	15	10	10				2 幸水・豊水 5-10 10 - - 3 " 5-10 - 10 5 4 " 5-10 - 8 -
	合計	20~25	10	10		・樹齢別の施肥量は、1樹当たり窒素成分 で1年生80~100g、3年生240~300g、5年生 400~500gを標準とし、リン酸とカリの施 用量は窒素の70~80%とする。施肥は樹冠 の拡大に合わせてその外周より少し大きめ の範囲に散布し、7~8年生から成木の施肥 量を全面に散布する。 ・地帯区分3で特に肥切れする土壌では、 夏期にカリも追肥する。					
	豊水	7×7m (20本/ 10a)	4,000	秋肥：9月	5~10			(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：1			
	冬肥：11~12月	15	10	10							
	合計	20~25	10	10							
環境保全型施肥のポイント					＜堆肥等施用のポイント＞						
ア 肥料成分の流亡量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。						
イ 幼木~若木にかけて施肥しない樹間部分は草生とし、地力の低い土壌では窒素、カリを施肥部分で5kg/10a前後となるよう施用するとよい。					イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。						
ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。					ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。						
エ 秋肥は速効性の肥料を用いる。					エ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。						
オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。											
キ 窒素の多用により果肉の内部褐変、石灰の不足により果実の尻腐れ等の生理障害を発生しやすいので、適正施肥に努める。											
ク 過剰な施肥はナシ樹に利用されないうえ、根域外に溶脱して地下水・河川を汚染するおそれがあるので適正施肥に努める。											

ナシ（西洋ナシ）

＜棚栽培＞

対象地域 (土壌)	品種名	栽植 密度	目標 収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥 (種類) N成分 kg/10a	その他 kg/10a	備 考	
					kg/10a	kg/10a	kg/10a				
地帯区 分1	ラ・フ ランス	7×7m (20本/ 10a)	2,700	秋肥：10月	10	8	10	(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：1		・樹齢別の施肥量は、10a当たり窒素成分 で2~3年生2kg、5~6年生4kg、8~9年生8k g前後を標準とし、リン酸とカリはそれぞ れ窒素の半量、等量を施用する。施肥は樹 冠拡大に合わせてその外周より少し大きめ の範囲に散布し、10年生前後から成木の施 肥量を全面に散布する。	
				冬肥：11~12月	4						
	合計	14	8	10							
環境保全型施肥のポイント					＜堆肥等施用のポイント＞						
ア 肥料成分の流亡量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。						
イ 幼木~若木にかけて施肥しない樹間部分は草生とし、地力の低い土壌では窒素、カリを施肥部分で5kg/10a前後となるよう施用するとよい。					イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。						
ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。					ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。						
エ 秋肥は速効性の肥料を用いる。					エ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。						
オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。											
キ 窒素の多用により果肉の内部褐変、石灰の不足により果実の尻腐れ等の生理障害を発生しやすいので、適正施肥に努める。											
ク 過剰な施肥はナシ樹に利用されないうえ、根域外に溶脱して地下水・河川を汚染するおそれがあるので適正施肥に努める。											

ブドウ

＜棚栽培＞

対象地域 (土壌)	品種名	栽植 密度	目標 収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥 (種類) N成分 kg/10a	その他 kg/10a	備 考	
					kg/10a	kg/10a	kg/10a				
地帯区 分1	あづま しずく	10×10 m (10本/ 10a)	1,200	秋肥：9月	4	8	8	(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：2		・他の地帯区分は以下のとおりとする。 地帯 品種 窒素(kg/10a) 区分 秋肥 春肥 追肥	
				追肥：5月中下旬	2						2 あづましずく 2 - 2 3 " 4 - 2 4 " 2 - 2 5 " 4 - 2 6 " 2 - 2
	合計	6	8	8							
	巨峰、 ピオー ネ	10×10 m (10本/ 10a)	1,200	秋肥：9月	2			(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：2			
	冬肥：11~12月	2	8	8							
	春肥：3~4月	2									
	合計	6	8	8							
	高尾	10×10 m (10本/ 10a)	1,200	秋肥：9月	2			(*牛ふん堆 肥1,000) 基準：1 上限：2		2 巨峰、ピオーネ、高尾 2 2 - 3 " 3 3 - 4 " 2 2 - 5 " 3 2 - 6 " 2 2 -	
	冬肥：11~12月	2	8	8							
	春肥：3~4月	2									
	合計	6	8	8							
環境保全型施肥のポイント					＜堆肥等施用のポイント＞						
ア 肥料成分の流亡量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。						
イ 6月は樹勢の安定化と肥料成分の流亡防止のために施肥しない。					イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。						
ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。					ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。						
エ 秋肥及び追肥は速効性の肥料を用いる。					エ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。						
オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。											

カキ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	蜂屋	10×10m (10本/10a)	2,000	秋肥:10月 春肥:3月	8 3	8	10	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	・他の地帯区分は以下のとおりとする。 地帯 品種 窒素(kg/10a) 区分 秋肥 春肥 追肥(6月) 2 蜂屋・平核無 6 3 - 3 " " 5 3 3 4 " " 6 3 - 6 会津身不知 5 - -
	平核無	8×8m (16本/10a)	2,000	秋肥:10月 春肥:3月	8 3	8	10	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	
	合計				11	8	10			
地帯区分5	会津身不知	10×10m (10本/10a)	2,000	秋肥:10月	6	8	6	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	・根群域が60cm以下の土壌では、2kg/10a程度増肥する。 ・樹齢別の施肥量は、1樹当たり成分で2年生90g、6年生250g前後を標準とし、10~15年生から樹勢と着果量を考慮し、成木に準じた量とする。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、成木では全面に散布する。
	合計				6	8	6			
環境保全型施肥のポイント				<p>ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。</p> <p>イ 秋肥は速効性と緩効性の肥料を組み合わせ用い、果実品質に悪影響がでない収穫期中盤以降に施用する。</p> <p>ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。</p> <p>＜堆肥等施用のポイント＞</p> <p>ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。</p> <p>イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。</p> <p>ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。</p> <p>エ 稲わらは樹冠下に施用すると乾燥防止のマルチ効果が期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。</p>						

オウトウ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	佐藤錦	7×7m (20本/10a)	800	秋肥:9月 冬肥:11月~12月	2 10	5	10	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	・樹齢別の施肥量は、10a当たり窒素成分で2~4年生1~2kg、6年生3kg、8年生6kg前後を標準とし、リン酸とカリはそれぞれ窒素の50%、80%を施用する。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、12年生前後から成木の施肥量を全面に散布する。 ・砂土~砂壤土などの養分の流出しやすい土壌地帯では、冬肥の半量を2~3月頃の春肥として施用する。
	合計				12	5	10			
環境保全型施肥のポイント				<p>ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。</p> <p>イ 施肥は、樹冠の拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲内に散布し、10年生前後から全面に均等に散布する。</p> <p>ウ 幼木・若木時には、樹冠の拡大を急ぐあまり窒素を多く施すと軟弱に育ち、胴枯れ病にかかりやすくなるので注意する。また、多窒素は枝の軟弱徒長につながるのと同時に、うるみ果、着色不良果や灰星病などが多発しやすいので注意する。</p> <p>エ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。</p> <p>オ ホウ素欠乏症が発生しやすいので、3年に1回程度土壌分析を実施し、ホウ砂等を施用する。</p> <p>＜堆肥等施用のポイント＞</p> <p>ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。</p> <p>イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。</p> <p>ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。</p> <p>エ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果も期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。</p>						

スモモ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	大石早生	7×7m (20本/10a)	2,000	秋肥:9~10月 春肥:3月	12 3	8	12	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	・樹齢別の施肥量は、10a当たり窒素成分で2~3年生2kg、5~6年生4kg、8~9年生8kg前後を標準とし、リン酸とカリはそれぞれ窒素の半量、等量を施用する。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、8年生から成木の施肥量を全面に散布する。
	ソルダム	7×7m (20本/10a)	2,200	秋肥:9~10月 春肥:3月	12 3	8	12	(*牛ふん堆肥1,000)	基準:1 上限:2	
	合計				15	8	12			
環境保全型施肥のポイント				<p>ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。</p> <p>イ 幼木~若木にかけて施肥しない樹間部分は草生とし、地力の低い土壌では窒素、カリを施肥部分で5kg/10a前後となるよう施用するとよい。</p> <p>ウ 土壌が乾燥し、施肥後も降雨がない場合は効果が現れないため、かん水が有効である。また、樹勢の低下が認められる場合は春肥の比率を増やし、かん水等により土壌の乾燥を防ぐ。</p> <p>エ 秋肥は速効性の肥料を用いる。</p> <p>オ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。</p> <p>カ 結実期に入り樹勢が弱った場合は、8月中下旬に礼肥として、速効性の窒素肥料を年間施用量の20%程度施用する。</p> <p>＜堆肥等施用のポイント＞</p> <p>ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。</p> <p>イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。</p> <p>ウ 山間部の耕土の浅い園では、堆肥の投入を積極的に行う。</p> <p>エ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。</p> <p>オ 稲わらを樹冠下にマルチ施用すると、乾燥防止の効果も期待されるので、干ばつ被害を受けやすい有効土層の浅いほ場等では努めて実施する。</p>						

キウイフルーツ

<棚栽培>

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類)	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	N成分 kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	ヘイワード	6×10m (16本/10a)	1,500	冬肥:11月 追肥:6月	15 5	23 2	7 1	(*牛ふん堆肥2,000)	基準:2 上限:4	
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。 イ 6月の追肥は施肥効果が高く、過剰な施肥は新梢生長の促進や品質低下につながるもので、施肥量は樹勢に応じて調節する。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。 イ キウイフルーツは葉面からの蒸散量が多いため、稲わら等でマルチを行い、蒸散の防止と土壌水分の有効利用を図る。					

ウメ

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類)	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	N成分 kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	白加賀	7×7m (20本/10a)	2,000	冬肥:11月	15	8	13	(*牛ふん堆肥1,000)	ホウ素5 (2年に1回)	・樹齢別の施肥量は、10a当たり窒素成分で2~3年生2~3kg、4~5年生7kg、6~7年生9kg前後を標準とし、リン酸と加里はそれぞれ窒素の半量、等量を施用する。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に散布し、9年生前後から成木の施肥量を全面に散布する。 ・土壌肥沃度が高い場合は、栽植密度を8×8m(15本/10a)とする。
	竜峡小梅	7×7m (20本/10a)	2,000	冬肥:11月	15	8	13	(*牛ふん堆肥1,000)	ホウ素5 (2年に1回)	
地帯区分5	高田梅	7×7m (20本/10a)	1,000	礼肥:7月(収穫直後)	2			(*牛ふん堆肥1,000)	ホウ素5 (2年に1回)	
				秋肥:9月~10月	10	8	10			
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。 イ ウメの生育に好適な土壌はpH6.5程度の微酸性土壌であるため、pH矯正のために苦土石灰を施用する。 ウ ホウ素欠乏障害が発生しやすいので、2年に1回程度土壌分析結果に基づきホウ砂を施用するとよい。					ア 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。 イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。 ウ 堆肥の連年施用により、品質の低下等が見られる場合は、施用量を減らすか隔年の施用にする。 エ ウメは浅根性の果樹であり、梅雨明け後の干ばつによる被害を受けやすいことから、稲わら等のマルチ等を行い、土壌の乾燥を防止する。					

イチジク

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類)	その他	備考
			kg/10a		kg/10a	kg/10a	kg/10a	N成分 kg/10a	kg/10a	
地帯区分1	樹井ドール	2.5×3.5m (114本/10a)	1,500	秋肥:9月末~10月中旬 冬肥:12~2月 追肥:6~8月	4 8~10 4~6	4 8~10 4~6	4 8~10 4~6	(*牛ふん堆肥1,000)	石灰100~150	・施肥量は、6年生以上の成木を想定。 ・石灰質資材の施用は、冬肥の施用時期より2~3週間早く実施する。
	ハワイゼノア	7×7m (20本/10a)	1,500	秋肥:10月上旬 冬肥:12月中旬 春肥:3月下旬 追肥:7月上旬	3 5 3 4	2 3 2 2	2 2 2 3	(*牛ふん堆肥1,000)	石灰100~150	
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 肥料成分の流出量を少なくするために、土壌管理は樹冠下をマルチもしくは清耕の部分草生とする。 イ イチジクは根群城が浅いこと、果実の収穫期間がかなり長期間に及ぶこと、また、一度に多量の施肥を行うと、濃度障害により根を傷めやすいことから、施肥は数回に分けて行う。 ウ 冬肥には、肥効が長期間持続する緩効性肥料や有機質肥料を主体にし、春肥、夏肥及び秋肥は速効性の肥料を用いる。 エ 他の樹種と比較してカルシウムの吸収量が特異的に多く、土壌pHも6.5~7.0の弱酸性から中性で生育が良好となる。石灰質資材を100~150kg/10a程度、冬肥の施用時期よりも2~3週間早く施用する。					ア 完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。豚ふん等の肥料効果の高い堆肥は多量施用をさけ、施用時期にも注意する。 イ 堆肥や稲わらは、連年施用による緩効的肥効が期待されるので、樹勢等を観察しながら施肥量を調節する。また、カリについては成分量の90%が、施用した年に有効化するので、その分減肥する。 ウ イチジクは、浅根性であることから、表層土壌の管理が重要となるので、敷きわら等のマルチが適当である。特に、稲わらは、夏期の地温上昇の抑制、土壌の乾燥防止、雑草の生育抑制、踏圧の緩和、雨滴の跳ね返り防止、有機物の補給等の効果があり、最適な土壌管理法である。稲わらを敷く量は、10a当たり1.5~2tが望ましい。					

ブルーベリー

対象地域(土壌)	品種名	栽植密度	目標収量 kg/10a	施用時期	窒素	リン酸	カリ	堆肥(種類) N成分 kg/10a	その他 kg/10a	備 考
					kg/10a	kg/10a	kg/10a	kg/10a		
地帯区分1	アーブルー、 ブルークロック、 アコヒル(ハイブリッド系)	1.8×3 m (180本/10a)	800～ 1,000	礼肥：8月下旬	2	1	1	(*牛ふん堆肥1,000) 基準：1 上限：	パークやオガクズで厚さ約10cmのマチ	・樹齢別の施肥量は、窒素成分で1樹当たり1年生7g、3年生10g、5年生20g、7年生30g程度とし、リン酸とカリの施肥量は窒素の50%とする。施肥は樹冠拡大に合わせてその外周より少し大きめの範囲に施用し、8年生前後から成木の施肥量を全面に施用する。
				春肥：3月中旬	5	3	3			
				追肥：5月中旬	2	1	1			
				合 計	9	5	5			
環境保全型施肥のポイント					<堆肥等施用のポイント>					
ア 浅根性であるので、乾燥害や冬期間の凍害をさけるため、土壌管理法は有機物による樹冠下マルチとする。					ア 石灰質資材が混和されていない完熟堆肥を使用する。					
イ 新たに有機物マルチをした場合には窒素飢餓が生ずるので、窒素施用量を20～30%増やす。					イ 豚ふん等の肥料効果の高い堆肥はさけ、*牛ふん堆肥(オガクズ等混合)の完熟堆肥を使用する。ただし、樹勢や果実品質に応じて堆肥施用を判断する。					
ウ 最適土壌pHは4.3～4.8の範囲であり、生理的酸性肥料を用いて土壌を酸性に維持する。					ウ ブルーベリーは非常に水を好む果樹であり、浅根性であることから樹冠下をマルチ管理することが望ましい。パーク、チップかす、オガクズ(針葉樹由来も可)などが保水性、通気性に富みマルチ資材として適している。					
エ 窒素肥料としてはアンモニア態窒素を好むので、有機質肥料や硫酸等を用いる。リン酸、カリ、苦土についても生理的酸性肥料が望ましい。										
オ 苦土欠乏症が発生しやすいので、苦土を窒素の25%量程度施用する。										
カ 施用する肥料は、可能な限り有機質のものを用いること。										

<果樹の施肥に際しての地帯区分>

地帯区分	土 壌	方 部	土 壌 の 種 類
第1地帯	肥 沃 度 中	会 津 を 除 く	洪積層、第3紀層などに由来する腐植の少ない砂壤土～埴土、その他下記のどれにも該当しない土壌
第2地帯	肥 沃 度 大	〃	有効土層の深い沖積層の厚い土壌
第3地帯	流 亡 程 度 大	県 内 全 域	砂土～壤質砂土、砂壤土の一部、浅層土
第4地帯	腐植質火山灰土	〃	腐植質のある火山灰土
第5地帯	肥 沃 度 中	会 津 の み	第1地帯と同じ
第6地帯	肥 沃 度 大	〃	第2地帯と同じ